



シナリオも大道具も子どもたちの手作り



劇の最後には途上国の現状について学ぶクイズを出題

## 劇で伝える世界の貧しさと豊かさ

世界には知らないことがたくさんある。出前講座で聞いた青年海外協力隊員の経験を広めたいと、滋賀県湖南市立三雲東小学校の子どもたちが選んだ手段。それは「劇」だった。



世界とつながる  
教室



ベネズエラでの協力隊員の活動を劇で紹介。全校児童が食い入るように見ていた(京都新聞提供)

### 青年海外協力隊員から学ぶ 新たな世界

「今日は100マス計算を勉強します。縦に10マス、横に10マスを書いてくださいね」  
「先生、僕、定規がないから線が書けないよ」  
「じゃあ、先生の貸してあげるね」  
しかし、2日たってもまだ定規は返ってこない。  
「あの定規、どうしたの？」

「隣の席の友達も困っていたから、半分に分けて貸してあげたんだ」  
滋賀県湖南市立三雲東小学校の体育館のステージで繰り広げられるやりとり。設定はベネズエラの小学校、青年海外協力隊員と現地の子どもの会話だ。

貧しさゆえに、文房具も満足に買えないベネズエラの小学生。それでも、友達同士で助け合いながら、たくましく生きている。ベネズエラで協力隊員として活動していた上井香奈さんの話だ。

### 途上国を舞台にした 劇で学びを発信

自分たちが知ったことを、ほかの学年のみんなにも伝えられないか。平和学習の授業で刺激を受けた6年生から、自然とそんな声が上がっていった。そこで学校恒例行事の人権集会で取り組む劇のテーマに、上井さんの話を選ぶことにしたのだ。  
タイトルは「平和について考えよう」

「Nベネズエラ」。主人公は、もちろん隊員時代の上井さん。現地の小学校での彼女の奮闘ぶりを再現することにした。「世界にはいろいろな暮らしがあることを伝えたい」「海外で頑張っている日本人がいることを知ってほしい」。6年生の実行委員が中心となって、みんなで思いを込めてシナリオを完成させた。

そのほかにも、大道具作り、演出配役決め。劇の準備は、すべて子どもたち主体だ。みんなで「いいものを」  
作りたい！と猛練習。「ベネズエラの子どもたちを演じるならやっぱり半袖を着た方がいいよね」と、寒さに耐えながら演じきった。  
そして終演後、会場からは割れんばかりの拍手が。自信にあふれた子どもたちの笑顔。先生たちはステージ上の彼らを温かい目で見守っていた。  
この経験をきっかけに、外の世界への関心が高まった三雲東小の子どもたち。「ベネズエラの暮らしは大変そうだけど、みんなが助け合いながら生活しているのが素敵」「栄養士になって、貧しい国の特産品で栄養たっぷりのメニューを作りたい」と、はつらつとした笑顔で話してくれた。

本当の豊かさとは何か。その答えをそれぞれの形で見つけた子どもたち。この春、卒業を迎えた彼らは、次のステージへと飛び立っていった。

出前講座でそんな話を聞いた6年生が、自分たちで台本から作った劇の1コマだ。  
世界に目を向け、人権を尊重し、優しさたくましさ身に付けてほしい。三雲東小では先生たちのそんな思いから、総合的な学習の時間を使って、さまざまな取り組みに挑戦している。その一つが、3年生の「せいかいとなかよし」という授業。JICA研修員やALTの先生との交流を通じて、彼らの国の文化や歴史について勉強したり、自分の関心がある国について調べたりしている。  
さらに、6年生で力を入れているのが「平和学習」だ。戦争さえなければ平和、というわけではない。学校に行けない、安全できれいな水が手に入らない、食べ物がない。そんな生活を「平和」と言えるだろうか。子どもたちに自分たちで考える力をはぐくんでもらうべく、JICAボランティアの経験者などを招き、開発途上国のリアルを学んでいる。  
そして昨年、三雲東小の6年生に話したのが上井さんだった。  
「日本では学校に行くのが当たり前。でも世界には、家のお手伝いなどで学校に行けない子どももいるんです」  
「世界できれいな水を使えない人は約8億人。清潔なトイレを使えない人はなんと25億人！」  
どの話も、子どもたちにとっては驚きの連続。「3時間歩いて学校に通う子どもいるなんて」「平和ってみんなが豊かになることなのかな」。一人一人



コスタリカやアルゼンチンなど、中南米からのJICA研修員と交流する3年生



開発途上国がどんな課題を抱えているかを紹介する上井さん

劇の様子は地元の新聞にも取り上げられた(京都新聞提供)



※三雲東小の教育目標「人間尊重の精神をふまえ、たくましさやさしさが調和した心豊かな子どもの育成」のっとり、人権にかかわる学習内容などを発表する場。